



# 風景を宿す建築

五箇山地域における学びと生業の連関結末点

私はとある集落で数十枚のスケッチを描きました。どのシーンをとつても自然と調和した美しい風景が描かれました。しかし、そこに描かれる建物は人が住む家なのか、それとも空き家なのか、見分けがつきませんでした。そこに人がいるという確かなこと。その確かな営みを、建築が覆い隠しているように感じました。人が減り続ける中でも、確かにそこにありながらも埋もれてしまっている営みを他者に伝えることはできないか。一人の小さな営みが、時間や空間を超えて遠い誰かに伝わるような、寂しさのない風景を作ることができないか。その答えを探すのが現代の建築家の責務だと感じました。



## 01 『風光』を読む

Background



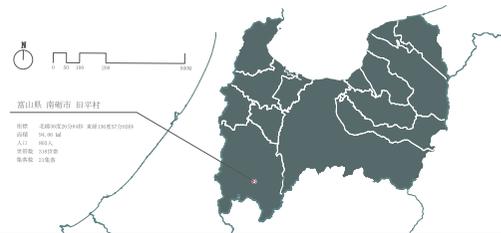
『風光明媚』という四字熟語がある。風光とは景色や眺め。明媚とは景色が美しく澄んでいる様子である。日本における風景の原義は、この【風光】であり、景そのものではなく風と光の織りなすものという意味がある。里山風景は暮らし・生業・自然が支え合いバランスを保ちながら空間をつつている。自然と調和した風景にはその地域特有の風と光がつくる風光が見れる。土地の様相が変化しようとも、本質を保つことでその地域に漂う風光は守られるのではないか。しかし、人口減少、近代化によって暮らしと生業の関係が変化するとともに、循環からはみ出すような放置されるモノが溢れてきており、「続く風景」からは遠のいている。

## 02 「結」の綻び

Site



敷地：合掌造りの里 五箇山地域 旧平村



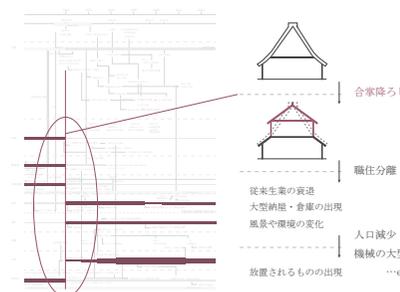
かつてこの地域には「結」という共同体が存在した。「結」とは合掌造りの建設から維持、茅葺屋根の吹き替えや茅場の管理などを相互扶助で行う組織である。鎌倉時代から存在した「結」はここ数十年で急激に数を減らし、今ではほぼ見られなくなっていった。そして現在、人口減少が加速しておりその変化の中で放置されるモノが多く出始めている。家屋や産業施設、小学校は使われなくなったまま建物だけが残されている。放置されたモノが増えているこの地域では、住民はすでにいつかの終末を受け入れてしまっており、「五箇山はいつか終わる」と唱える住民もいる。そこで私は、「結」が急激に数を減らし始めた 70 年前から現在までの集落の変遷を調査した。調査の結果、800 年以上続いた風景の骨格が見えてきた。

## 03 暮らし・生業・自然を繋げていた建築

Research & Consideration



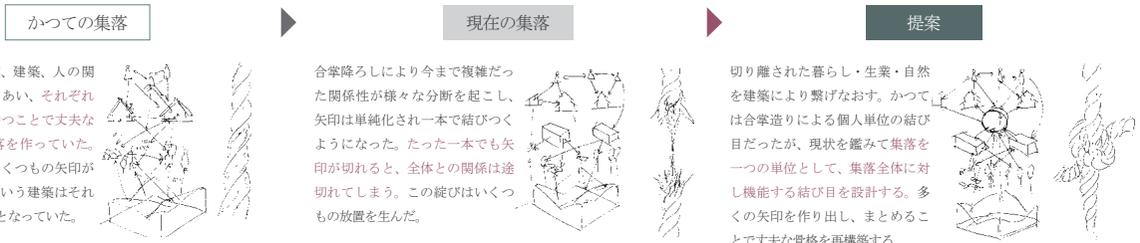
かつてこの地域ではほぼすべての家屋が合掌造りだった。その形式はいくつもの合理的な側面を持っていた。合掌造りという一つの建築様式が暮らし・生業・集落全体の風景の連関結末点を作っていた。



1960 年代、「合掌降ろし」が起きた。合掌降ろしとは茅葺屋根からトタン屋根や瓦屋根に葺き替えると同時に二階部分を増築することである。これまで職住一体だった暮らしから職住分離の生活へ。それに伴って集落周辺の植生変化、工業製品による部分の劣化。そして核家族に伴い、家屋は解体へと向かう。産業は個人から組合や企業へと変わり、機械の大型化により倉庫や蔵などの設置も現れ始めている。これまで合掌造りという建築が担っていた暮らしと生業の距離が「合掌降ろし」によって遠ざかってしまった。合掌造りを失った現在の集落は社会的な変化を受け入れられず、「放置されるもの」が次々と出てきている。

## 04 集落の矢印を結び直す

Concept image



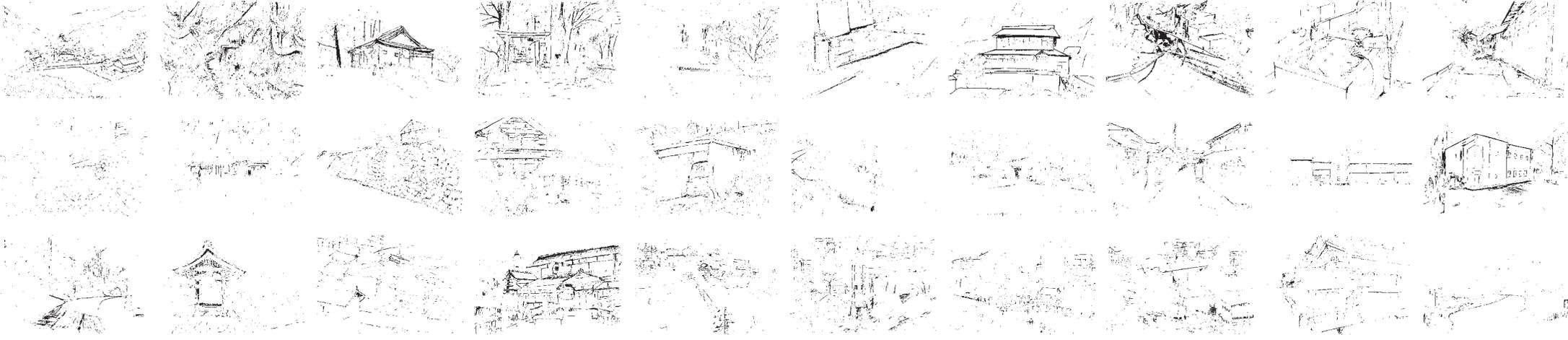
## 05 故郷となる場所

Suggestion

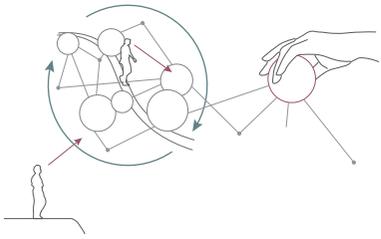
2025 年度より平村にある唯一の高校にて『全国募集』が始まる。毎年全国からの土地に縁もゆかりもない高校生が訪れ、3 年間この地で暮らし学ぶ。高校生の日常を中心とした集落全体の暮らしと生業・自然を繋げる建築を提案する。彼らの思い出の中にこの土地の美しい風景が残るように、そして彼らが大人になった時、帰ってきてこの場所を故郷と感じられるように「続く風景」の始まりをつくる。



引用：県立南砺平高高等学校の全国募集ホームページ



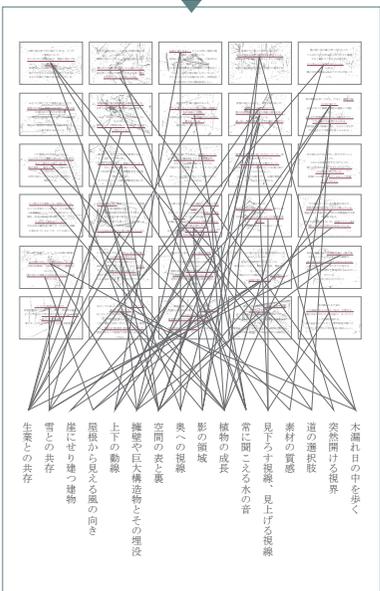
06 循環がつながり部分と全体 Approach



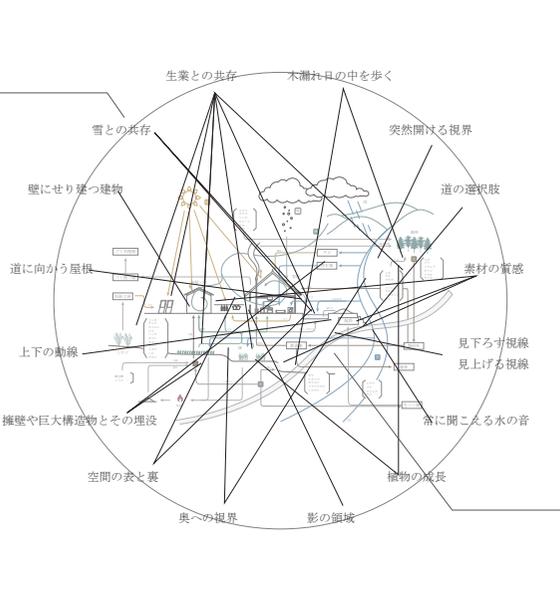
集落を歩く体験はその多くが近景からなり、全く異なるシーンの連続である。しかし、それぞれ一部と思っていたシーンの背景には大きな循環が存在している。この背景にある循環が全体をつなぎとめていることにより、全く違う場所でも同じような風光を感じることができる。

設計においては、部分を形態として抜き出すのではなく、背後にある循環の矢印一つ一つに気を配ることで集落との連続的な体験を生み出しつつも遠景としての全体性を獲得することができる。と考える。

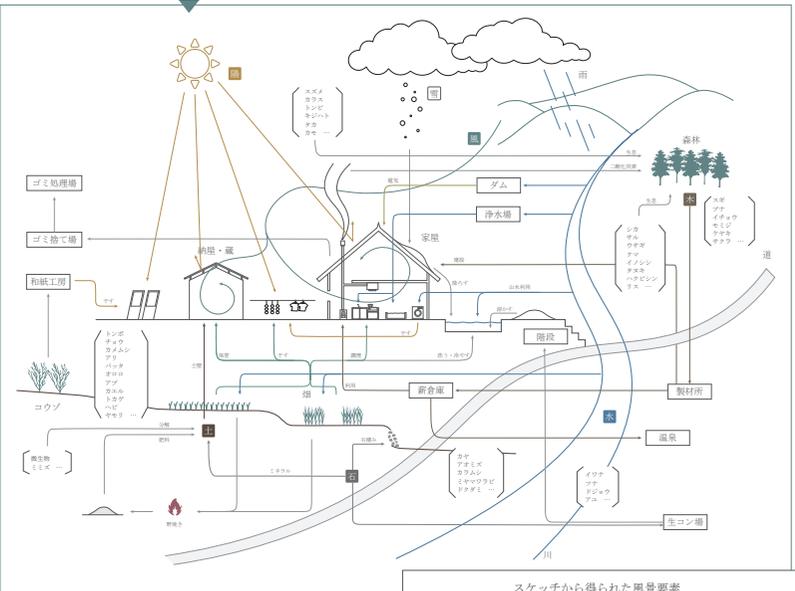
風光とその背後にある循環をスケッチを用いたリサーチから導き、設計に落とし込む。



**風光の言語化【scenic image】**  
集落を歩く五感を伴った体験と描く行為をもとに、感じたことを類型化、言語化する。



**風光と循環の重ね合わせ【overlay】**  
二つの調査を重ね合わせ、体験の裏側にある循環を視覚化し、風光の所在とその周辺の矢印を発見する。



**風景循環【macro linkage】**  
人と自然の対話を一対一の最小単位で分析する。スケッチから風景要素を抽出し、集落全体の循環図を描く。

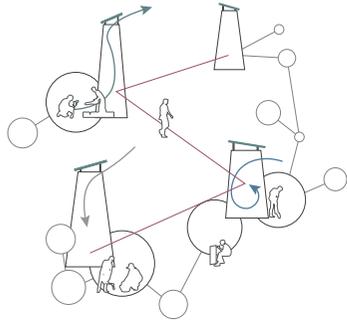
River & Wind flow direction	Main street & Sub street	Roof Direction	Green Distribution	With Difference of Elevation	Pool for melting snow	Scale	Front and back spaces	Agricultural Space	Difference of Elevation
1/10000	1/5000	1/10000	1/10000	1/10000	1/10000	17100	17100	17100	17100
川に沿って風が吹く。河川に向かい集落内にくいつつも小さな川が流れている。	大きな道と小さな道が入れ子状になっている。小さな道は起伏が激しく、階段や坂道も散見される。	風の向きに対し、身近手方向が垂直になるようにし、風を受け流すように家屋が建っている。	まばらに大きな木々があり、急に視界が開けたり広範囲に影が落ちたりする。	高低差が激しく崖に建つ家屋が多い。擁壁やRC造の基礎を利用し斜面地でも土地利用が多くなる。	雪を溶かすための溜池が各住居に設置してある。家の裏側に多く畑仕事などにも利用される。	かつて家屋が合掌造りだった時、一階部分に生活機能の大半が位置していたため今も大きな平面をもつ。	家屋の表の空間は堂々と建つ文化が今でも残り、裏の空間は生活感が溢れ入り組んだ構造の家屋が多い。	家屋の中には土間が、近くには納屋が位置し、周囲は田畑に囲まれている。納屋は土壁が多い。	住居の裏側は山や崖に面することが多く、表側は擁壁などで広い空間をつくっている。

風光の所以 [Map research]

言語化されたそれぞれの風光と関係する情報を調査し、何がそれを作り出す所以になっているかをスケールを横断しながら導き出す。集落や伝統的な住居形式の全体性の中から部分としてどう現れているかを見出す。

07 小さな営みをつなぐ塔

Design



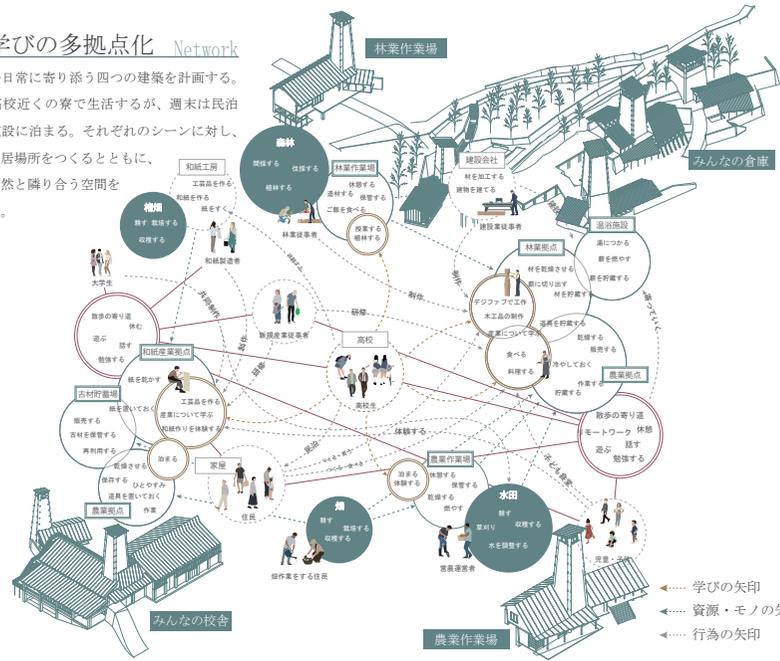
生業の場の一部は自然エネルギーを最大限活用するために塔状とする。それぞれの塔の内部では地域の循環の一部を担っており、雪や風、水などの自然エネルギーを利用している。

そして、塔が持つ役割は自然エネルギーの活用だけではない。塔のふもとでは循環の一部である生業が展開しており、その小さな営みは塔によって遠方へ視覚的に伝わる。地域全体に大きく広がっている生業の場に対して一つの塔の連なりが繋がりを生む。一つの塔からは必ず別の塔が見え、それを辿ることで大きな地域の循環を浮かび上げる。

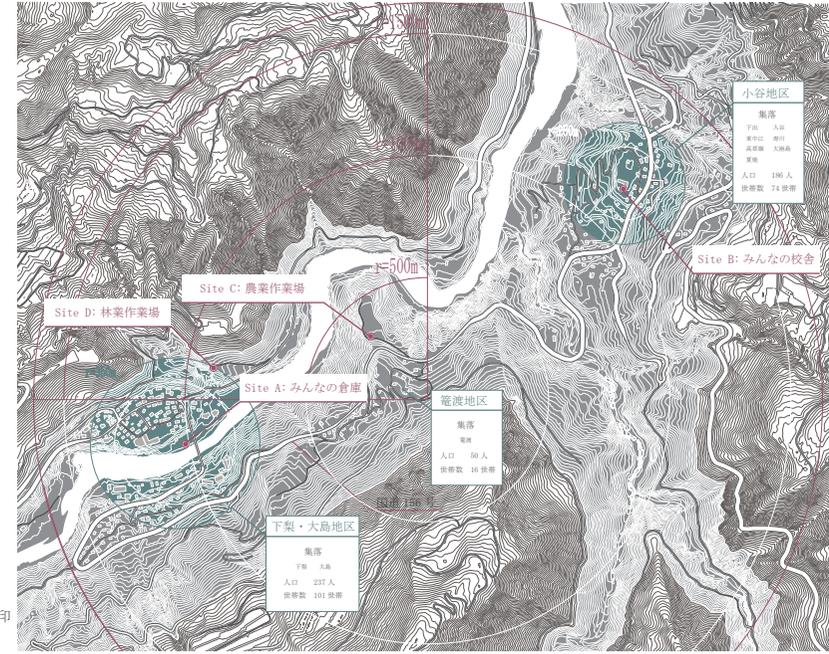
塔は小さな営みを拾い上げ、確かな存在を遠い誰かに伝える媒介となる。

08 学びの多拠点化 Network

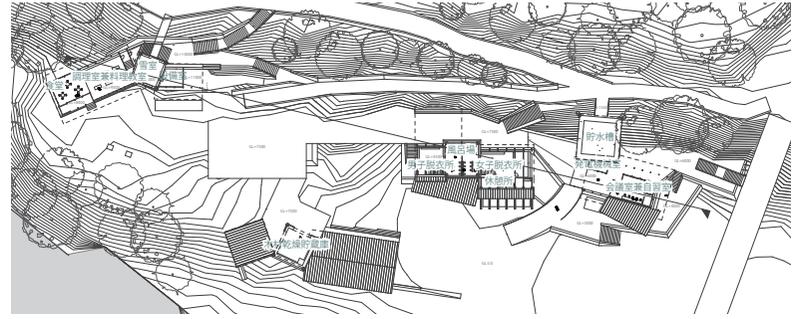
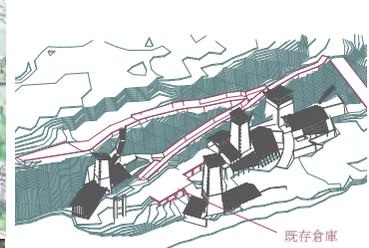
高校生の日常に寄り添う四つの建築を計画する。平日は高校近くの寮で生活するが、週末は民泊や宿泊施設に泊まる。それぞれのシーンに対し、高校生の居場所をつくることにも、生業、自然と隣り合う空間を設計した。



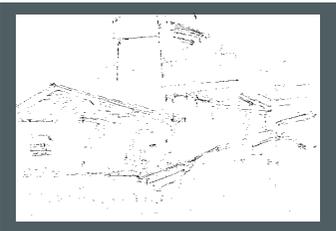
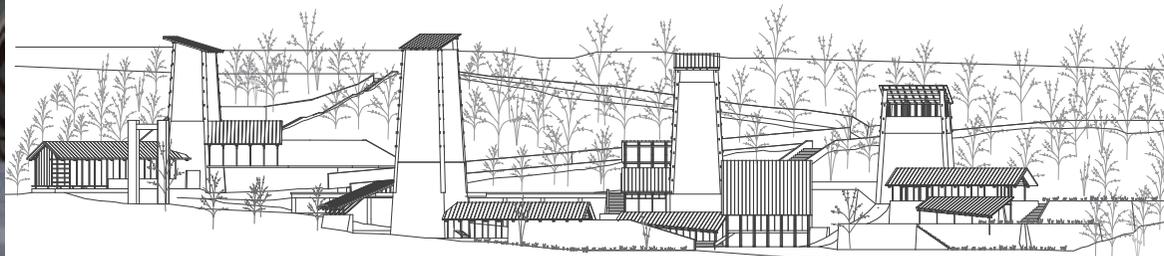
● 学びの矢印  
 ● 資源・モノの矢印  
 ● 行為の矢印



**みんなの倉庫**  
 鹿倉庫として放置されていた場とその土地を利用した暮らしの拠点を計画する。西側から農業拠点、林業拠点、温浴施設、貯水場である。林業の倉庫で切り出した薪を温浴施設で用いたり、貯水場の発電システムで作り出した電気を各建物へ供給したりと敷地内でも資源の循環が行われている。高低差の激しい敷地において既存の道や擁壁、倉庫跡を用いて緩やかに下方へ導く。



元々あった道や擁壁、倉庫跡を残し、道の選択肢や居場所を増やす。



木材や家具が屋根からはみ出している建物がある。外では薪を切る人、中では機械が木材を切り出している。



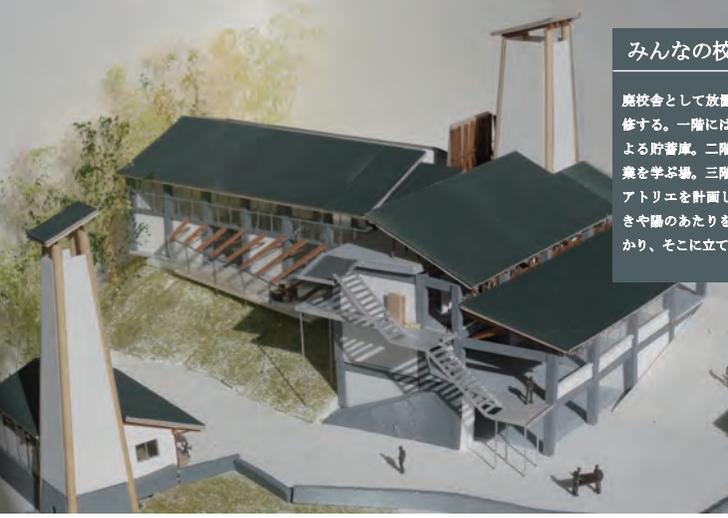
塔の中には大量の木材が並んでいた。下から風が吹き上げている。煙突効果によって下の空間があたたまり、空気が上がっていく。制作作業が木材の乾燥につながる。



厨房は調理室のような風貌で授業や料理教室に使う。裏にある塔は書室で、集落で採れた野菜を貯蓄している。暑い日には冷房としても冷気を活用する。

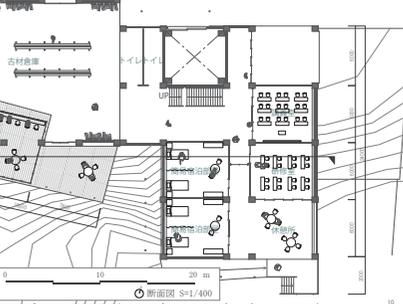


0 10 20 m  
 南側立面図 S=1/500



### みんなの校舎

廃校舎として放置されていた場を改修する。一階には農業拠点と雪室による貯雪庫。二階には簡易宿泊や生業を学ぶ場。三階には和紙の工房とアトリエを計画した。屋上には風向きや雨のあたりを考慮した屋根がかけられ、そこに立てかけ和紙を干す。



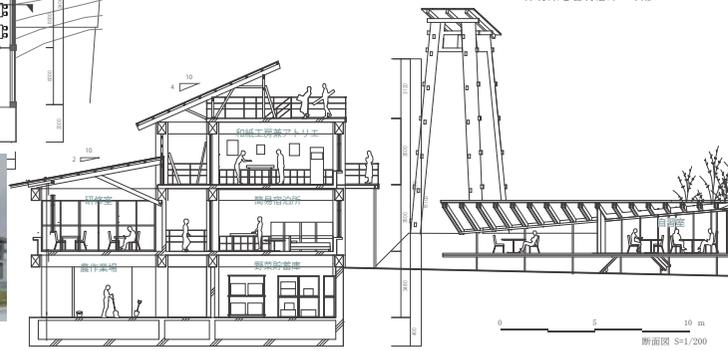
風光【見下ろす視線、見上げる視線】[生業との共存]



既存校舎

柱・梁の一部を減築

木造軸組を増築、教員宿舎の建替  
体育館を古材倉庫へ改修

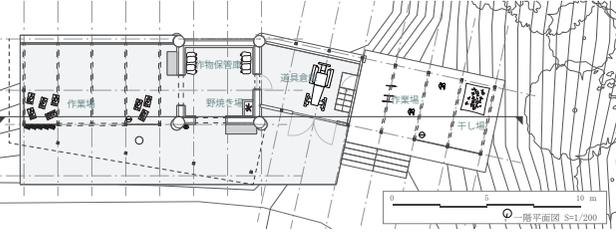


断面図 S=1/200



### 農業作業場

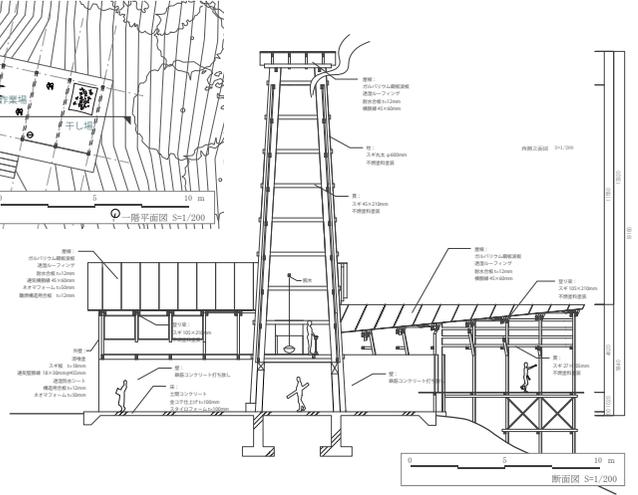
新作放棄地となっていた水田を再び耕し、その近くに農業作業場と簡易宿泊所を計画する。田植え時期や収穫期は高校生を含め様々な人が宿泊し、毎年利用する人が変わっていく。



風光【見下ろす視線、見上げる視線】



風光【突然開ける視界】

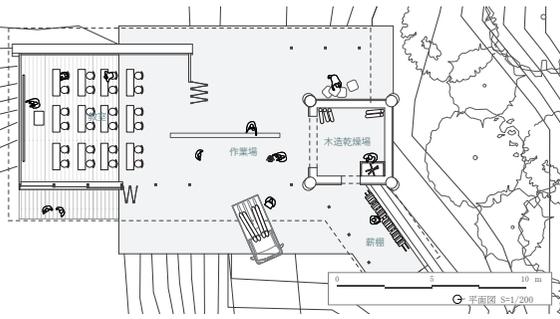


断面図 S=1/200



### 林業作業場

放置林の隣地に林業の作業場と学びの場を計画する。開閉式の大開口により二つの営みの幅を操作することができる。塔の高さは50年成長した杉と同じ高さである20m。集落から見える塔は伐採と植林を繰り返すたびに50年周期で見え隠れする。



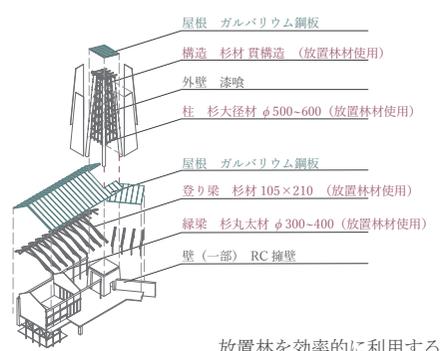
風光【影の領域】[生業との共存]



風光【奥への視線】



風光【空間の表と裏】



放置林を効率的に利用する

空間の全体構成は生業のための大きな空間を確保するために、柱を最低限に減らし、二重の登り梁を用いた。雪の重みに耐えられるよう梁の中心に傾斜をしている。また擁壁が土留めの役割を果たしながらも水平力を担保している。敷地周辺の放置林材を胸高直径で分別し、大きく流通に乗らない大径材をそのまま、節の多い材は丸太や細かい梁へと、大ききごとに適した部材へと変換した。

- 屋根 ガルバリウム鋼板
- 構造 杉材貫構造（放置林材使用）
- 外壁 漆喰
- 柱 杉大径材 φ500-600（放置林材使用）
- 屋根 ガルバリウム鋼板
- 登り梁 杉材 105×210（放置林材使用）
- 縁梁 杉丸太材 φ300-400（放置林材使用）
- 壁（一部）RC擁壁



半屋外の長い廊下には梁や和紙がかけられている。隙間から入る光は木漏れ日のようだ。



屋上の上ると和紙が干されている。板によって仮想的に区切られた場所影の落ちた空間が現れる。



擁壁を基礎や壁として利用して、斜面に建てることで、山の貴重な平場を生業の場のために残せる。



ふと見上げると、棚田の水平線に並ぶように屋根が伸び、その真ん中に塔が建っている。



大径材を4本立て、それをもとに軸組を組み立てていく。伝統的な貫構造を用い、最後は縄で力強く結ぶ。



機械があった部屋の壁には黒板があり、間仕切りを聞くと途端に学びの場となる。